日本農業新聞
2014年(平成26年)6月19日(木曜日)　総合12版　(2)

万象点描

破壊繰り返す新自由主義

農的社会デザイン研究所代表　蔦谷栄一氏

世界中でミツバチの顕著な減少が進行しており、これは蜂群崩壊症候群（CCD）といわれる。その原因として農薬の影響や徹底した人為的管理と働き過ぎによるストレス、ダニなどの寄生虫など、さまざまなものが疑われているが、原因はまだ特定されていない。

■「みつばちの大地」

ミツバチが授粉することによって人間が口にする食物の約3分の1が生産されるとされるが、そのミツバチの大量失踪の原因究明に映像で迫ったのが、スイスのマークス・イムホーフ監督制作による映画「みつばちの大地」である。

この映画の真骨頂は、スイス、米国、ドイツ、中国、オーストラリアなど世界各地を訪問、養蜂の実情について丁寧な取材を積み重ねたところにある。そして、最新の技術を駆使しての、巣箱内の生態やコロニー、飛行中行われる女王蜂の交尾など、マクロ映像による実写は、ミツバチ生態の神秘と生命のダイナミズムを訴え掛け、心を揺さぶる。

本映画ではミツバチ失踪の原因は特定されていないが、現在、人間の活動が地球の多様な生命のみならず自らの存在をも脅かしている現実を紡ぎ出すと同時に、小さな「いのち」を通して、自然と人間の持続可能な関係を問いかけており、鋭い文明批評となっている。

米国では一斉に白い花をつけたアーモンドの木々が果てしなく続く光景が映し出される。ここで利用されているミツバチは、花を求めて養蜂家によりアメリカ全土を移動する。養蜂家のJ氏にとっては巣箱1箱がいくらになり、巣箱全体でいくらの収入になるかだけが問題である。ミツバチそのものに対する関心も愛情も希薄だ。

アーモンドなどに散布される農薬がミツバチの生命を脅かし、トラックによる長距離移動がストレスを与え、さらには病原菌や寄生虫に感染するリスクを高める。このため抗生物質など薬品の使用が余儀なくされるが、これも金のため、資本主義社会の中では仕方がないとする。そのJ氏も飼養するミツバチの大量死に遭遇、養蜂業の存続自体が危ぶまれる。

言うまでもなく、ミツバチの世界は人間の世界を反映・象徴している。新自由主義は金・数値にしか価値を認めず、自由化・規制緩和が全てであり、これによる経済成長だけが未来の展望を可能にするとする。アベノミクスはその典型である。環太平洋連携協定（TPP）、農政改革、農業改革、集団的自衛権、そして労働時間規制の緩和へとまっしぐらである。「創造的破壊」のつもりが、「創造なき破壊」を繰り返し、ふるさとを喪失させるだけ。何が「美しい日本」か。

生命への敬意がないところでは、全てが失われる。金・数値でなく、生命にこそ最大価値が置かれる社会でなくてはならない。ミツバチが生きられる世界が人間社会の再生をもたらす。この「みつばちの大地」は、東京・岩波ホールで7月11日まで上映される。